



日本最北の地の医療事情

宗谷医師会 副会長
市立稚内病院 院長
高木 知 敬

宗谷地方は日本最北の地であり、宗谷医療圏は北海道の21医療圏の中で、医師数人口比ではワーストワンの地域である。

宗谷の産業構造は、漁業・農業・観光業が三本柱である。これらの産業では夏場が稼ぎどきであるため、病院には相当重症にならないと受診しない傾向にあり、夏場の外来入院患者数は減少し、冬場に増加するというパターンが常態化している。

京都府とだいたい同じ面積に約7万人の住民が暮らしているが、総合病院は市立稚内病院ただ1施設しかなく、圏内医師数85人のうち32人が当院の医師である。直近の総合病院は名寄市立総合病院であり、距離にして170キロ離れている。

診療科は10科で、内科・外科・精神神経科は北大から、小児科・整形外科・皮膚科・泌尿器科・産婦人科・耳鼻咽喉科・眼科は旭川医大から常勤医師派遣をうけている。非常勤の麻酔科は旭川医大、神経内科は北大、循環器内科は北海道社会保険病院と北光記念病院から支援を受けている。

二次救急医療は、脳外科を稚内禎心会病院が担当し、残りはすべて当院が引き受ける。平成23年3月に循環器内科が撤退したため、現在最大の課題は、循環器の救急医療であり、平成23年度には名寄・旭川・札幌へ合計45回の救急搬送を余儀なくされた。夏場は道北ドクターヘリを利用できるが、冬場は昼時間の短さや道北の悪天候のためヘリは飛ばないことが多く、救急車による地上搬送に頼っている。これには医師の同乗が必要で、搬送担当医師の疲労と、医師1人分の当院の手薄化が課題である。

平成16年に新医師臨床研修制度が始まり、当院の医師数は41人から32人に減った。その間、初期研修医はたった1人だけであった。

医師数減少に特効薬はないが、稚内市では助成金制度の開業医誘致条例を作った結果、平成22年に整形外科、平成24年には小児科が新規開業した。

宗谷の医療崩壊を防ぐには勤務医・開業医を問わず、とにかく常勤医師に来てもらいたい。

明るいきざしは、当院の看護師数の増加である。病院をあげて稚内高校看護科の授業や実習に努め、月10万円の奨学金を出すことにより、平成24年3月から7対1看護基準を取得するまで増えた。

前期研修医よ、もっと地方病院に！

日高医師会 理事
浦河赤十字病院 院長
武岡 哲 良

浦河赤十字病院は、日高管内における地域センター病院として長年地域医療に携わって参りました。

立地的には、札幌から180km、苫小牧から130km離れた遠隔地において、急性期から慢性期まで幅広く医療を提供しておりますが、最近医師不足のためにこの地域の医療を守ることが大変厳しい状況となっております。

さかのぼってみますと、新医師臨床研修制度ができる前は最大25名の医師が在籍しておりましたが、現在常勤医は14名まで減少し、当直を割り当てるのも困難な事態となりつつあります。

町内の開業医の先生が月2回午後5時から9時まで救急外来を診てくださり本当に助かっておりますが、いまの頭数から1～2人でも欠けると救急外来を維持することが難しくなります。

幸い昨年からは、足利赤十字病院、武蔵野赤十字病院、福岡赤十字病院から1ヵ月交代ではありますが、医師派遣に協力してもらい急場をしのいでいるところです。しかし、これもいつまで続くか分からず、何時派遣が打ち切られるか心配でなりません。

また、当院の中堅医師は単身赴任者が多いため、週末の当直を割り振りするのに、毎月、医局長は頭を悩ませているようです。

私も病院長としてこの地域の住民の健康を守る責任がありますが、同時に在籍する医師たちの健全な生活も守らねばならず、日夜頭を悩ませているところです。

対策の一つとして、前期臨床研修医の活用が考えられます。先に述べたように現在足利と武蔵野日赤からは前期研修医が派遣されていますが、彼らが1ヵ月の研修を終えて帰るときに皆一様に口にするのは「今までは指導医の手の平の上で仕事をしていたことに初めて気がついた、冷や冷やドキドキしながら1ヵ月を過ごしたことが自分にとって大きな自信になった」ということです。

道内の臨床研修医も、各地の地方病院に今よりももっと積極的に出かけてくれたなら、地方病院にとっては大変貴重な戦力になることを、声を大にして強調して終わりにさせていただきます。